

5 わたしと剣道^{けん}

剣道教室からの帰り道、ゆみ子は、友だちのよしみに声をかけられました。

「ゆみ子、私、剣道教室をやめようと思うの。」

「低学年からずっと一緒に^{しょ}がんばってきたのに、どうして。」

ゆみ子はびっくりして足をとめました。よしみは、ゆみ子の顔をじっと見つめながら、

「だって、今、剣道ってはやらないよ。テニスとかバスケの方が、かっこいいと思うの。」

ゆみ子は、小さな声で、

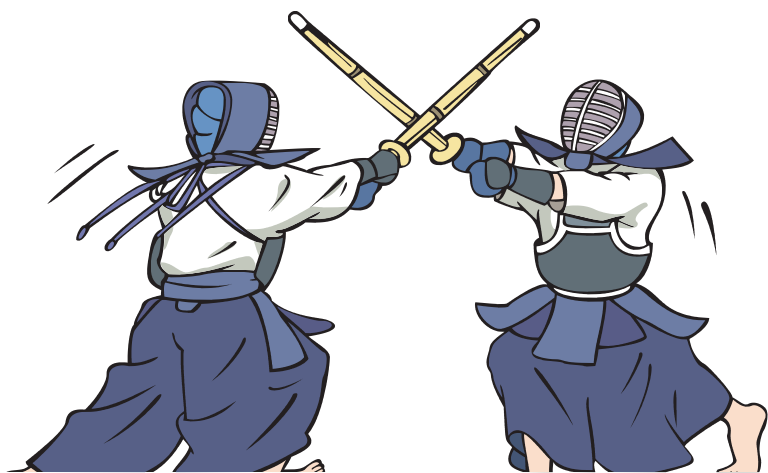
「うん、そうかな・・・。」

と言ったきり、何も言えませんでした。

家に帰ってからも、さっきのよしみの言葉が頭からはなれず、何もする気にもなれません。リビングでテレビを見ていても、少しもおもしろくありません。会社から帰ったお父さんに声をかけられても、気づかないほどでした。

「ゆみ子、元気がないね。どうしたんだい。」

お父さんがたずねました。ゆみ子は、今日の帰り道のことを話し始めました。ゆみ子に剣道を進めてくれたのは、お父さんだったからです。





「よしみは、剣道って今どきはやらないからやめるって。私、どうしようかな。」
お父さんは、ゆみ子の顔を見つめて、

「ゆみ子は、何のために剣道を習っているのかな。仲良しの友だちが一緒だから？それとも自分のため？もう一度考えてごらん。」

「私は・・・。」

ゆみ子が答えられずにいると、こんな話をしてくれました。

お父さんが子どもの頃から通っていた剣道教室の先生に聞いた話で、それは、こんな話でした。

剣道を、日本の若者や子どもたちに広めることにつくした地元羽生の小沢愛次郎おざわあいじろうさんの話です。愛次郎さんは、若いころから剣術に優れ、桑崎くわさきに興武館道場こうぶを設けました。でも、当時（百年くらい前）の日本は、西洋文化を取り入れることに熱心で武道という日本の伝統を受けついで守ろうとする人は、だんだん少なくなっていました。愛次郎さんは、若者には日本の礼儀や努力の大切さを伝えることがこれからの日本に大切だと考えました。国会議員となった愛次郎さんは、中学の体育の授業に剣道を入れることを呼びかけました。

でも、仲間の議員から大反対を受けてしまったのです。

しかし、愛次郎さんはあきらめず多くの議員にかけ合い、とうとう剣道を授業に入れることにこぎ着けたという話でした。

お父さんは、少し間を置いて、改めて、

「ゆみ子が剣道から学んだことは何だい？」
とやさしい口調で言いました。

ゆみ子は、はっとしました。同時に、練習後に必ず唱えている言葉を思い出しました。
道は困難こんなんだから立ち向かう。

剣の道は精神の道

剣の道は礼儀ぎぎの道

剣の道は人の為ための道

（そうだ、わたしは剣道のこの精神が大好きだったんだ。）ゆみ子は、さっと立ち上がり、自分の部屋にある竹刀しなひを手に取り、力強くにぎりました。